



廣 瀬 川

第99号

令和3年
1月31日

仙台市小学校長会

発行者／花淵 浩司（会長） 責任者／千田 博史（広報部長）

主張

コロナ禍に思う

副会長 佐藤 哲郎（片平丁小学校）



新型コロナウイルス感染症の影響は学校現場にも大きな混乱を与えると同時に、学校教育の根幹に関わることを考える契機にもなりました。

その中の一つはデジタル化の課題です。これまで私たちは子供たちが学校に来ることを前提に教育活動を進めてきました。そして、いかにすれば子供たちが通いたくなる学校になり、活動を楽しみにしてくれるのかを念頭に、より質の高い教育の創造を目指して学校経営に腐心してきました。しかし、今般の新型コロナウイルスは、その前提条件を覆すような衝撃をもたらしました。

社会全体が急速にリモート化するなかで、学校のデジタル化の遅れが社会の大きな課題になりました。国がGIGAスクール構想を前倒しするなど、現場でも急激な変化が起きています。デジタル技術を活用して子供たちの学びを保障することは我々の急務の課題です。

もう一つは、学校教育が有する価値の再確認と検証が求められたことだと思います。学校再開後は、「限られた時間の中で、子供たちに本当に必要な力、身に付けさせたい資質・能力を踏まえた上で、何を実施し、何を削るのか」を、各学校が真剣に議論し、検討し、今年度のプランを作成し直しました。

それと同時に様々な制約がある中で、新たな視点での授業の工夫も行いました。また、半ば慣例的に行われていた行事なども、より一層ねらいの明確化

と運営の工夫を迫られています。

さらにデジタル化の推進と呼応するように学習の個別化や、より個に応じた対応も議論にあがってきました。しかし、これらの動きには素直には賛成できません。ICTが今学校が抱える課題を解決する一つの方策にはなりえても、決して万能ではないと思うからです。また、個別化の大切さは十分に感じながらも、集団による学びでこそ伸びることがあることも経験的に感じているからです。私見ですが、コロナ禍で、学校教育が持つ大きな意義、特に小学校においては、子供相互での交流や、子供と教師の心身の交流、触れ合いが彼らの成長に欠かせないことが再認識されたとも考えています。リズム同調による実地のコミュニケーションが心を豊かにし、子供たち自身が学びの基盤を創り出しているのだと思います。

本年度、学校は従来の経験値では判断できない難しさに直面しましたが、その時こそ、教職員の結束と、保護者・地域のエールを感じることができました。決断を求められるたびに、私はかつて先輩から送られた「校長としての矜持をもって職務にあたるように」という言葉をかみ締めていました。そしてその支えになったのが、校長会の連帯であったことはいうまでもありません。これからも互いに磨き合い高め合って、新しい時代の教育の創造に微力を尽くしていきたいと思っています。

内 容

○主 張	1
○特 集	2
○座 談	3
○提 言	16

○学区紹介	18
○研究部から	19
○生徒指導部から	21
○新任校長所感	22
○編集後記	24

特集

東北社会科教育研究協議会宮城大会を終えて

伊藤 恵子（富沢小学校）

昔、先輩の先生が、「出先でパンフレットを見付けると、授業に使えるかもと思ってつつい持ち帰るんだよ。」と笑っていらっしゃいました。そして、現在の私は、「なぜいろいろな言語のパンフレットを用意しているのでしょうか。」などと問いを考えながら、英語、中国語、韓国語……と施設に置かれたすべての言語のパンフレットを手になっています。自分が授業をする機会はほぼないと分かっているのに、社会科を学ぶ教員としての習性でしょうか。

令和元年11月15日、仙台市立長命ヶ丘小学校を会場に、第55回東北社会科教育研究協議会、第49回宮城県小学校社会科研究大会仙台市大会を開催しました。授業後の学年別授業研究会では、東北各地から参加してくださった皆様からたくさんの御意見をいただきました。多くの方々の御指導・御支援に心より感謝申し上げます。

今大会の研究主題は、「よりよい社会について自ら考え、関わろうとする子供の育成」です。この研究を通して、社会の担い手として課題を理解・把握し、よりよい社会の在り方や関わり方などを多角的に考え、主体的に課題を解決しようとする子供を育てたいと考え、設定しました。また、研究主題を具現化する手立てとして、問題解決的な学習過程の中で、「問いの構成」「学び合い」「振り返り」の三つの視点に重点を置きました。

- 1 社会的事象の見方・考え方を働かせ、協働して課題を追求したり解決したりすることができるようにするために、小単元の目標とのつながりを意識して「問いの構成」を吟味し、学習過程の中に位置付けるよう工夫しました。
- 2 社会的事象を深く理解したり、選択・判断したりすることができるようにするために、調べたことや考えたことを一方的に伝えるのではなく、伝え合うことを通して、お互いの考えを広げ深める「学び合い」の場を設定しました。
- 3 学習の理解や思考を深めるとともに、学びに向かう意欲や社会に関わろうとする態度を育むための「振り返り」の活動を取り入れました。

この三つの視点については、これまでも仙台市小学校教育研究会社会科研究部会（仙小社研）の研究

で取り組んできたことです。今大会では、長命ヶ丘小教員による授業を四つ、仙小社研部員による持ち込み授業を四つ行いましたが、そのほとんどが新学習指導要領に示された新しい内容を教材化したものであることが大きな提案でした。また、国士舘大学の澤井陽介先生の御指導の下、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた単元構想が一目で分かる「小単元構造図」も新しい提案です。

本来であれば、今年度の研究は、東北大会の成果と課題を生かし、県大会や仙小社研の授業研究を通して更に深めていくはずでした。しかし、新型コロナウイルス感染防止のため、県大会、仙小社研の活動も全て中止となり、その機会を失いました。そればかりではなく、令和3年度の本吉・登米大会の中止も早々と決定しました。このままでは、積み重ねてきた仙小社研、宮城県連合小学校教育研究会社会科研究部会の研究の歩みが止まってしまうと強い危機感を抱いております。

社会の授業の進め方が分からない、地図帳や副読本の使い方が分からないという先生がいます。社会の見学は楽しいけれどふだんの授業はつまらないという子供も多いようです。工場や施設の見学ができず教科書中心の学習になれば、社会科嫌いの子がますます増えるのではないかと危惧しています。そこで、「見学しなくてもできる授業を提案しませんか。」と仙小社研の常任委員に呼び掛けました。賛同してくれた有志たちが電子メール等を使って情報交換を行い、授業プランを作成しています。（富沢小HPに掲載しています。）また、県内の児童が使用する副読本「わたしたちの宮城県」の編集作業にも取り組んでいます。今回は小改訂で、編集会議は1回のみでしたが、「仙台以外の学校で使える事例地を」「データを新しいものに」と熱い議論となりました。令和4年度版は新学習指導要領に則った全面改訂を目指します。

東北大会の一番の収穫は、困難な社会情勢の中でも社会科の教師として何ができるのかを考え判断し行動する教員、そしてこれからの仙小社研を支える部員が確実に育っていることだと私は思います。

座談会

震災時の教訓を風化させないための取組について

●とき 令和2年10月13日(火)

●ところ 仙台市教育センター

【挨拶】花渕会長

一昨日は震災から9年7か月がたち、昨日は東日本台風から1年となり、災害について、地震ももちろんのこと台風や大雨、洪水が複雑で多様化しています。今回は震災時の教訓を風化させないための取組ということで、震災に限らずに災害から学校を、地域をどのように守っていくべきかについて、話し合いを行いたいと思います。



東日本大震災の半年後に始めた「復興七夕づくり」も今年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から残念ながら中止となりましたが、あの震災からあと半年で節目となる10年目を迎えようとしています。小学校の低学年は全員震災後に生まれた子供たちであり、高学年も震災時に1、2歳で、記憶ははっきりとしていません。これからは小学生全員が、震災時の記憶がないといってもよいのではないかと思います。

そのような中、今回は「震災時の教訓を風化させないための取組について」をテーマに、座談会を行います。

仙台市は、神戸市をはじめ全国や世界各地からの支援をいただきながら震災から、復旧し、復興に向けて取り組んでまいりました。復興住宅が完成し、荒浜小学校が震災を伝える震災遺構になるとともに、昨年10月には被災した沿岸部にかさ上げ道路「東部復興道路」も完成するなど、ハード面での整備はゴールを迎えつつあります。

しかしあの時、児童生徒を含め1万8,429人の尊い

命を失うとともに、多くの遺児や孤児、そして愛する子供を亡くした親御さんがおります。家や車などの物は、直したり新しくしたりできましたが、尊い命は元に戻りません。多くの方々が未だ喪失感、失望感を持ち続けていると推察いたします。

本校には、南相馬市から避難を続けている子供も在籍しています。そうしたことから、子供たちや避難した住民の皆様の命を守る上で、「震災の教訓とは何か」、そしてそれらを伝え続け、400年周期で来ると言われている次の東日本大震災などで「命を守るための防災対応力を子供たちにどのように身に付けさせていけばよいのか」を御議論いただきたいと思います。

また、近年日本各地で頻発している豪雨や台風、それに伴う洪水被害等様々な災害が起こっています。そのような災害に対して、「with コロナ」の中、どのように対応していかなければならないのかについても御示唆をいただければ幸いです。

本日は、市教委より教育指導課長の本郷栄治様においでいただいております。本郷様は、本市の防災教育の要である教育指導課長として、日頃より御指導いただいております。大所高所からお話を伺えればと思います。また、校長先生方は、それぞれの学校で防災教育に熱心に取り組まれています。震災を知らない子供たちに、震災の教訓をどう伝え、防災対応力をどのように身に付けさせているのか具体的にお話しいただければと存じます。

それが、近い将来想定される南海トラフ地震・津波や首都直下地震などでの学校の対応の一助になることを祈念いたしまして、開会の挨拶といたします。

<出席者>

本郷 栄治

(仙台市教育委員会
学校教育指導課長)

花 洩 浩 司

(仙台市小学校長会長
仙台市立木町通小学校長)

阿 部 淳 一

(仙台市立高森小学校長)

丹 野 伸 裕

(仙台市立市名坂小学校長)

蓮 沼 秀 行

(仙台市立柳生小学校長)

千 田 博 史

(仙台市小学校長会広報部長
仙台市立荒井小学校長)

佐 藤 潤 一

(仙台市小学校長会広報部副部長
仙台市立荒町小学校長)司会
八 島 雅 人(仙台市小学校長会広報部
仙台市立小松島小学校長)

どうぞよろしくお願いいたします。

千田広報部長

今回は、震災後10年の節目の年にあたり、仙台市では「第2期仙台市教育振興基本計画における基本的な方向性」の中で「震災の教訓を生かした防災対応力の育成」を掲げ、震災遺構「荒浜小学校」の活用など「仙台版防災教育」の推進をうたっております。一方で記憶の風化が課題となっており、当時の震災を体験した校長として、



- 1 震災時の教訓・体験をどのように受け止め、後世に何を伝えていきたいか。
- 2 自助・共助の力を育むため、これまでの取組や新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点を踏まえ、自校においてどのように「仙台版防災教育」を進めようとしているか。

の2点について示唆を得たいと考えております。

「新生活様式」に沿った行動が求められる中、基本となる「第2期仙台市教育振興基本計画」の共有と安心を創る「仙台版防災教育」を校長としてどのように具現化していくのかについて再考・提案する内容としたいと考えております。併せて、座談会の要約を仙台市小学校長会報「廣瀬川」に掲載し、会員の研修資料としても活用させていただきたいと思っております。

司会（八島）

ただいま広報部長の千田校長から説明がありまし

たが、今日の座談会では、「震災時の教訓を風化させないための取組について」をテーマに、震災後の防災教育等の取組について、「第2期仙台市教育振興計画」及び「杜の都の学校教育」に示された施策等をここで改めて共有した後で、一つ目は、「震災時の教訓・体験をどのように受け止め、後世に何を伝えていきたいか」について、二つ目は、今後の本市防災教育への提言を含め、「これまでの取組や新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点を踏まえ、自校においてどのように『仙台版防災教育』を進めようとしているか」について、この大きく二つの視点から、参会の皆様にお話を伺っていきます。

はじめに、仙台市教育局教育指導課 本郷栄治課長よりお話をいただきます。

震災から10年、令和時代を迎え、第2期仙台市教育振興基本計画に示された施策、本市が今後目指す仙台版防災教育の方向性や現状、課題等について、お話しいただきたいと思います。

本郷課長

◆「第2期 仙台市教育振興基本計画」に示された理念と本市が目指す「仙台版防災教育」

本日、仙台版防災教育についてお話をさせていただく機会を与えていただき感謝申し上げます。よろしくお願いいたします。

平成24年に「仙台市教育振興基本計画」が策定され、10年間で育む力として、「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」を掲げています。この力の源となる四つの力、「自ら



を認め自らを信じる力」「自ら学び自ら考える力」「チャレンジする行動力」「市民として主体的に社会にかかわり共に生きる力」を育むことを目指しています。

第1期の5年間では、「子供たちの可能性を広げる学校教育を実現する」「家庭での親と子の学びを応援する」「市民一人一人の学びの機会と活動を広げる」「人と社会をつなぐ豊かな学びを創出する」「『学びのまち・仙台』を支える基盤を充実させる」という五つの基本的方向を掲げ、「地域とともに歩む学校づくり」「確かな学力の育成」「豊かな心の育成」等、30の分野で取組を進めてまいりました。特に、東日本大震災からの復旧・復興や被災児童生徒の心のケアなどに重点的に取り組んできました。また、国においても「第2期教育振興基本計画」の策定、「いじめ防止対策推進法」の制定、学習指導要領の改訂等、様々な動きがありました。そこで、第1期計画の課題や国の動向を踏まえ、平成29年に「第2期仙台市教育振興基本計画」が策定されました。

第2期の計画では、「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」の実現に向けて、基本的方向を「学校教育 心豊かでたくましい子どもを育てる」「生涯学習 学びにあふれ交流するまちをつくる」「地域・家庭 とともに子供を育て、豊かな学びをつくる」「教育環境 学びを支える確かな土台づくりをすすめる」の四つに分類するとともに、仙台ならではの特色ある施策を「仙台カラー」と位置付けています。

「仙台版防災教育」は「仙台カラー」の六つの重点施策のうちの一つであり、基本的方向「学校教育」のミッションの一つとしても位置付けられております。具体的には、年度ごとに指定している研究推進取組発表校において策定した系統的なカリキュラムを含め、教科等横断的な視点で防災教育を推進することができる「仙台版防災教育実践ガイド」の発行、東日本大震災における津波の脅威や教訓を伝えるために保存されている「震災遺構仙台市立荒浜小学校」

の活用学習等を通じ、自助・共助といった防災対応力の育成に取り組んでいます。

研究推進取組発表校の指定については、平成27年度から行政区ごとに5～6校指定しています。発表校は、各学校や地域の実態を踏まえて自校の目指す児童生徒像を設定し、実践に取り組み、「年間指導計画作成上のポイント」「取組の具体」「児童生徒の変容や実践上の課題」等について発表し、各中学校区で協議し、地区ごとに情報共有を行っています。昨年度の発表会では、「地域合同防災訓練」「減災教育出前授業」「震災に関する講演会」等の発表がありました。地域合同防災訓練につきましては、昨年度小中合わせて139校が実施予定でしたが、多くの学校が予定していた10月に、大雨による避難所開設のため防災訓練が中止となった学校もありました。今年度も136校が実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染症のため、多くの学校が中止にすると聞いています。新しい生活様式の下、地域とともにどのような防災訓練、避難所開設時の協力ができるかについては、引き続き検討していく必要があると思います。震災に関する講演会につきましては、震災当時の校長先生や、震災当時6年生だった卒業生、避難所運営をされていた方等、様々な方からお話を聞かせていただいているようです。災害時に自分の命を守るためにどのように行動すればよいかなど、体験者から話を聞くということは、震災から10年がたとうとしている今、震災の教訓と記憶の風化の防止に役立つ貴重な機会と考えます。語り部の育成や派遣、リモートでの講演会の実施等、教育委員会でも考えていかなければならない視点だと考えています。学校では、若手教員がどんどん増えていますので、震災時に学校が果たした役割や教職員の苦労などをOJTとして語り継いでいくことも必要かと思います。

この発表会を実施することによって、発表校だけでなく、参加する全ての学校が、毎年自校の年間指導計画改善の視点を持ち、仙台版防災教育の推進に

役立てていただいていると思います。本来であれば、今年度で全ての小中学校の発表が終了する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、実践発表会を来年度に延期いたしました。

「仙台版防災教育実践ガイド」は昨年4月に改訂版を発行し、合同校長会で配付しました。このガイドは、「改訂版」と「授業実践例」の2分冊となっています。「改訂版」には、新学習指導要領の趣旨を踏まえた内容や年間指導計画モデル等を掲載し、「授業実践例」には、防災対応力の育成を図るための実践例や「震災遺構仙台市立荒浜小学校」の活用例等を掲載しております。各学校が防災教育の年間指導計画を作成したり、防災教育に関する授業を実施したりする際に参考にできる内容となっていますので、是非活用していただきたいと思います。今後は、実践ガイドを活用した取組事例を集め、各学校に情報提供するとともに、実践ガイドの改訂に生かしていく予定です。

「震災遺構仙台市立荒浜小学校」の活用学習については、一般公開が始まった平成29年度には、小学校10校、852人が見学しました。その後、平成30年度は18校、1,599人、昨年度は44校、3,461人と年々見学者が増えています。「震災を風化させない」「語り継ぐ」ということはこれから必要になってきます。その点で、荒浜小学校見学は非常に有効ではありますが、現地までの交通費という問題があります。教育委員会では、昨年度から荒浜小学校を見学する際の交通費の予算化を図ってきました。昨年度は、研究推進取組発表校から小学校19校への補助を行い、今年度は36校の補助を行う予定でした。しかし、今年度につきましては、新型コロナウイルス感染症対策のため、見学を取りやめざるを得ない学校がありました。今後も各学校における防災教育を推進するにあたり、少しでも実感を伴った学習活動が展開できるよう、引き続き予算の確保と全ての小学校への拡充を検討していきたいと考えています。また、今年度、荒浜小学校の見学と語り部の話を聞くことを

予定しておりました防災主任研修も中止せざるを得ませんでした。

「震災を風化させない」「語り継ぐ」という視点から「復興プロジェクト」についてです。各学校の実情に応じて様々実施されていることと思いますが、そのプロジェクトの一つに「七夕の折り鶴」があります。今年度は仙台七夕まつりが中止となり、10回目の折り鶴制作はなくなりましたが、来年度以降については、校長会等の関係団体の方々から御意見を伺いながら、継続して検討をしていきたいと考えています。また、復興ソングについては、杜の都の学校教育にも防災教育の年間指導計画に適宜位置付けることとするとしています。今から25年前の阪神淡路大震災。その時被災地神戸でつくられた復興への希望の歌「しあわせ運べるように」は、神戸市民に浸透するのに10年ほどかかり、今では多くの市民がこの歌を歌えるそうです。また、日本各地や世界でも歌い継がれていると伺っています。仙台にも「希望の道」「仲間とともに」というすばらしい復興ソングがあります。今回「希望の道」の歌詞を改めて読みました。震災当時の記憶がよみがえる歌詞です。「あの日のことを 心に刻み」「歩き続けよう 希望の道を」と小学生らしい素直な気持ち、復興への決意が感じられます。これから10年後、20年後に多くの仙台市民が歌えるようになってほしいものです。是非、学校で復興ソングを歌い続けていただきたいと思います。

最後になりますが、昨年10月、最高裁の上告棄却により大川小訴訟控訴審の「震災前の学校と行政の防災対策に過失があった」とする判決が確定され、「校長や教頭らは、一般の住民よりも防災に対してはるかに高い知識や経験が必要であった」と住民よりはるかに高い防災知識が求められています。今後も児童生徒の安全確保の視点を持って、危険箇所の点検やハザードマップ等から学区で予想される災害の想定と具体的な対応の検討、そして気象情報や災害情報等の収集については継続して実施いただき

たいと願っております。

司会（八島）

平成24年10月の座談会では、教育振興基本計画は、震災の年の2月に概ねまとまっていたましたが、震災を受け、防災の視点を取り入れて公表を1年先に延ばしたという経緯が報告されていました。ただいま本郷課長からは、東日本大震災後は、復旧・復興や被災児童生徒の心のケアなどに重点的に取り組んできたとの御指摘がありました。ここで一つ目のテーマ「震災時の教訓・体験をどのように受け止め、後世に何を伝えていきたいか」について、発表者の皆様からお話を伺いたいと思います。

1 「震災時の教訓・体験をどのように受け止め、後世に何を伝えていきたいか」について

阿部校長

私は、東日本大震災の時は荒浜小学校の5年担任でした。勤務4年目ということもあり、荒浜小学校についてある程度、理解を深めていました。



当時の川村孝男校長先生は、地域とのつながりを大切にしながら、高い危機管理意識を持っていたので、「防ぐべき被害」を最小限に食い止めることができたのだと思います。校長として重要なこととして「地域に開く教育課程のPDCAサイクル」が挙げられます。荒浜地域各町内会の情報、児童の家庭の特徴を理解すること。集めた情報は的確な判断へ結びついていると思います。また、学校には毎日のように町内会役員、地域ボランティア、放課後ボランティア、防犯まもライダー、米作りアドバイザーなどの役目を担う地域の方々が学校に来ていました。こうした方々からの日常的な会話から、地域の実態や住民の思い、そして学校の果たす役割を確かなものにしていきました。

津波襲来を想定した避難計画もPDCAに基づき絶

えず見直しをしていきました。その際、住民からの情報や願いも加味しました。結果として、校庭には避難せず、全児童を4階教室に避難させることと、住民の方は校舎3階より高い階の教室に町内会ごとに避難させることになりました。さらに、担当者で机上訓練を行い、高齢者や体の不自由な方への配慮も必要だと認識を深めました。

荒浜小学校の存在と学校の機能を理解した上で、大切にすべき避難所の安全を確保するという意識は、校長として学ぶべきことであります。

東日本大震災の津波により、荒浜地区の住居、商店、町工場、水田や畑、運河そして人々の生活をいっぺんに無くしてしまいました。荒浜小学校の校舎に取り残された子供たちは、怖がっていました。押し寄せる海面がだんだん高くなっていきます。少しでも高いところへ避難しようと屋上にいくことになりました。校舎2階の床上40cmぐらいまで押し寄せた津波でしたが、屋上にいる私の足元まで波が到達しているかのように感じました。このまま自分も流されてしまうかもしれないとさえ思いました。子供たちもきっと同じ気持ちだったと思います。一緒に屋上に移動し、寒さに耐えながら、いつもと違う真っ黒の荒浜の波が、がれきとともに煙を巻き上げながら流れていくのをただ見ていました。

荒浜小学校に避難してきた住民、保護者とともに子供の命を守れるように校長として考え、決断しなければいけないという緊迫した事態でも川村校長先生は職員に対し冷静で的確な指示を出しました。

「低学年児童から順にホバリングしてヘリコプターで救助します。阿部先生は、第1便でヘリコプターに乗って、避難場所で待機し、次々来る児童を受け入れながら子供たちの安全を確保してください。」全職員に避難方法と役割をすぐに指示しました。次の日の18時頃まで長時間続いた救助活動ですが、校長として一刻も気を緩めることはできなかったと思います。責任感ある川村校長先生は、校舎に残っている人が誰もいなくなったことを確認して最

後にヘリコプターに乗りました。

地域の皆さんにとって「学校は安全」という信頼がありました。地域合同防災訓練は、毎年必ず実施され、地域の方も多数参加していました。訓練には、近くの仙台市消防局基地の協力もありヘリコプターでホバリングの救助訓練も行いました。また、5、6年生児童には、けがをした人の手当方法を含めた「共助」の心も育成してもらいました。防災訓練後に行われるBFC（少年消防クラブ）との鼓笛隊パレードも、安心安全な町づくりへ大きく貢献していました。

「学校は安全」という原則を守ることを徹底して実現しようとした実行力と危機管理意識の高さはとても尊敬に値するもので、私は校長として持つべきものであると思っています。

丹野校長

人は危機的状況にあるとき、何を最優先するのか、その人の人間性が表出しやすいことを学びました。避難所に来られた方はもちろん、対応に当たった教職員もしかりです。



私は当時将監小学校教頭として、早坂校長に仕えていました。2時46分に発災、収まらない揺れがようやく終わり、いざ校庭に避難といったときには、増築が続いた校舎だったため、校舎内外とも亀裂が走り、随所で壁が崩落、校舎中が一面真っ白の状態だった記憶は今も鮮明に残っています。3階にいた6年生全3クラスと同階の理科室にいた5年3組だけが避難して来ない心配な状況にありながらも、避難指示、検索指示、状況確認、引き渡し指示、避難所の準備と、一つ一つの判断と教職員への指示が全く動揺することなく冷静沈着だった校長の姿は忘れられません。第一の優先は子供の命であり、常に次なる対策に向けては、教職員を集め情報の共有と意見の聴取、その場において役割ごとに指示、トップダウンとボトムアップを絶妙に生かしたリーダー

シップは、誰もが不安な中であって皆の大きな支えになりました。よって、先生方からも今すべき対策が次々と提案され、行動に移すことができました。すばらしいチーム力でした。

3日後には体育館も危険であるとの判断を受け、避難所は閉鎖しましたが、翌日には、校長は各町内会長に呼び掛け避難所運営を開始。地域にすぐに協力していただけたのは、日常的に地域とつながっていた証でした。さらに、将監東中学校や将監中央小学校への避難民の受け入れ調整、全児童が将監中央小学校に受け入れてもらうための調整、地域総ぐるみで行った引っ越しへの援助要請、全てネットワークのある学校づくりを行ってきたからなし得たのだと考えています。他の避難所へ引き渡したお年寄りには校長自らが親身に寄り添い、先を争う校庭の給水所では和やかな雰囲気づくりをし、本校の復興に向けてはいつも前向きに気概ある学校経営に取り組みました。さらに、プレハブ校舎建設の現場の作業員との交流までも校長は持ちました。それは自然と子供たちにも伝わり、建設現場の窓へのメッセージ交流、感謝の会まで派生しました。今、後進の校長に伝えたいこと、それは、冷静な判断力、連携調整力、同時に人々に寄り添った温かな対応です。そして子供たちを支えてくださった人々のマンパワーのすばらしさ。9年が経過した今も変わっていません。

蓮沼校長

私は、震災時に学校勤務ではなかったので学校現場での震災時の教訓・体験とは異なり恐縮ですが、教頭で勤務した東六郷小学校での、鈴木一彦校長の取



組についてお話をさせていただきます。当時を振り返り改めて思うことは、被災地での防災教育は、次世代に震災の記憶と教訓を伝える人材を育成する役割を持ち、それが世界中から受けた支援に応え、多くの人々の将来不可避の災害への備えや対応につな

がるであろうということです。そのようなことから被災地での防災教育の役割は重要であると思っています。

東六郷小学校は校区の津波被災により、平成28年度末で六郷小学校へ統合となりました。本日の進行の八島校長は私の前任者で、被災直後に着任され併設先の六郷中学校で教育活動の平常化に御尽力されました。私が着任した時期は、学校生活の基盤はほぼ整いましたが、「被災コミュニティの復興」と「閉校」への葛藤や、児童の心のケアに配慮しながらの被災校での防災教育に向き合う時期でした。

鈴木校長は、当初、震災で途絶えた地域活動をPTAと手を携え、取り戻しながらふるさと教育の大地づくりに取り組みました。教職員には、児童が取り組める地域の復興につながる活動を示して思いを語り、保護者や地域の方々とは、学校の教育活動と連携した地域活動で共に汗を流し、NPOや行政、大学、企業とつながり、情報を得ながら様々な取組を進めていきました。閉校前の最終年度には、教育目標を「ふるさとに愛着を持ち、たくましく生きる児童の育成」とし生活科・総合的な学習の時間を中心にふるさと教育に取り組みました。それは、児童が被災した地域のことを学び郷土愛を育むと同時に、被災校での防災教育でもありました。児童の心のケアを進めながら、徐々に被災した校舎や被害を受けたエリアに出向き、当時の様子を地域の方に聴きました。記録をたどる活動を手始めに、整備されていく避難タワーなどの防災施設や地域住民による防災の備え、地域が行政と連携した取組について学んでいきました。震災当時幼く漠然とした被災の記憶しかなかった児童も、災害の痕跡に触れ震災時の状況をなぞる活動により、ふるさとの地域で起きたことを少しずつ理解していきました。また、復興に向かう取組の努力を、身近な大人である親や住民の行動からも学ぶことができました。最後には防災の視点を踏まえ、これからの地域の姿を形にする取組に発展していきました。

児童が、震災当時の地域の様子をリアルに捉え、地域の方々が復興と防災の備えに取り組む姿に触れながら学んだことは、児童のこれからの生き方につながる防災学習になったと思っています。当時の児童の学びがやがて花を咲かせ、将来はそれぞれが住む土地で、震災の教訓や記憶を伝えて未来の防災・減災の一助となることを期待しています。

司会（八島）

震災から間もなく10年を迎えますが、当時の校長のリーダーシップやひたむきに向き合う教職員の姿から、仙台版防災教育の根幹に関わる思いや願いが見えたように思います。当時の取組や思いを忘れず、後世にしっかり伝え、気持ちを新たに仙台版防災教育の充実発展に寄与してまいりたいと思います。

二つ目のテーマに移ります。本郷課長から「体験者から話を聞くということは、震災から10年がたとうとしている今、震災の教訓と記憶の風化の防止に役立つ貴重な機会と考えます。語り部の育成や派遣、リモートでの講演会の実施等、教育委員会でも考えていかなければならない視点だと考えています。」との御指摘もありました。現在、震災時には生まれていなかった児童が次々と入学しています。教師として震災の体験をしていない教職員も増えてきています。また、震災遺構「荒浜小学校」の活用も課題となっています。さらに今年度は、新型コロナウイルスという世界規模の困難な状況もあり、十分な教育を行いにくい現状にあります。

ここからは、視点の二つ目として、令和の時代の校長へ、「これらの状況を踏まえ、自校においてどのように『仙台版防災教育』を進めようとしているか」について、また、新生活様式が求められる中、それぞれの学校で更に拡大と深化を図る仙台版防災教育への提言について、お話ししたいしたいと思います。

2 「これまでの取組や新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点を踏まえ、自校においてどのように『仙台版防災教育』を進めようとしているか」について

阿部校長

今後、仙台版防災教育について取り組みたいと考えていることは二つあります。

一つ目は「東日本大震災を風化させない」という点です。現在の小学生のほとんどは経験していません。ですから、自分が住んでいるこの仙台で起きた地震と津波、そして被害の様子を教えることが必要です。荒浜小学校震災遺構の積極的な活用は、風化させないための有効な資料だと思います。当時の震災によって受けた荒浜地区の被害の様子、児童の苦しさや児童の復興に向けた頑張り、保護者と地域の皆さんの献身的な取組を伝えていくことが大切だと思います。また、荒浜小学校の機能等も併せ、各学校の実態に応じた防災教育と仙台版防災副読本の活用等を継続して学習できるような教科横断的なカリキュラム作成をしたいと思います。

今年度は、3年生の校外学習で荒浜小学校震災遺構に行きました。事前指導として荒浜小学校の震災前後の様子について私から話し、震災遺構の見学の際に児童なりにめあてを持って臨めるようにしました。現地担当職員の説明後は、私からも当時の様子について話しました。児童の見学している様子から効果的だと思いました。また、11月には本校の職員研修として荒浜小学校震災遺構を訪問する予定です。先生方とともに、東日本大震災発生前後の状況と教職員、児童、地域の避難者の動きを解説しながら研修する予定です。実地での見学をすることによって多くの先生方が今後の仙台版防災教育に役立てることを狙っています。

二つ目は、「自助・共助の力を高める学校、家庭、地域3者連携」という点です。

自分たちの町には、様々な種類の災害の危険があるという意識を今以上に高めていくことが必要だと

感じています。岩手県釜石市は被災地の一つとして知られていますが、「釜石の奇跡」と呼ばれた津波被害から生存率99.8%だった避難方法です。皆さんも御存知のように「命てんでんこ」の気持ちは、まさに日頃からの3者連携のたまものだと思います。

「学校は安全」という安心感だけでなく、自分の身は自分で守ることを家族と話し合い、どんなものが必要かを準備し、自分が置かれた被害の状況で、どのように行動するべきなのかを考え行動できることが大切だと思います。

その具体的な方法としては、防災避難訓練の実施。自分たちの町の安全な場所の確認、隣の家との情報交換、町内会行事や子ども会育成会行事の積極的な参加などはこれらにも通じると思います。東日本大震災のような自然の猛威から、自分の命を自分で守ることができたそのプロセスを併せて、学校・家庭・地域3者が理解し、高い意識を持って連携することが大切だと思います。

本校では今年度、新型コロナウイルス感染症対策のために、3者連携にも多くの制約があります。なお出口の見えない状況ではありますが、3者連携を続けられるように、地域合同防災避難訓練を最少人数で行います。お互いに気持ちを通じ合わせ「自分の命は自分で守るという気持ちを高める」ことが自助・共助の要素と感じています。

丹野校長

震災から9年半がたち、充実を重ねた仙台版防災教育も新たな局面を迎えていると考えています。その要因の一つ目は、新学習指導要領でもうたわれているように、予測困難な時代への突入がすでに始まっているからです。昨今の異常気象による災害の大規模化、新型コロナウイルス対応もしかりです。その要因の二つ目は、同じ仙台市内においても地域によって災害状況は異なり、防災教育の自校化もその必要性が高まっていると考えます。本校では「未来を生き抜く心豊かでたくましい児童」の育成を目



震災遺構 仙台市立荒浜小学校

指し、次のような三つの取組をしております。

一つ目の取組は、生きる力の育成を軸にした探究型の学習を推進し、課題への対応力を高める取組を大切にしています。本校では昨年5学年において防災減災の視点から総合的な学習に取り組みました。震災遺構荒浜小学校を活用した学習、地域避難所運営委員が作成した、自助・共助の言い伝えをカルタにつづった「仙台弁防災カルタ」からの学び、さらに七北田川沿いの学校ということもあり、洪水水害への対応へも視点を広げました。地域の現状問題を捉えながら、課題解決に向かうことにより防災への意識や対応力も高まると考えています。このようなプロセスを踏むことによって、子供たちは将来大人になったときも、たくましく解決に当たることができるのではないかと考えています。この5年生が今年6年生になり、コロナ禍で当初、恐る恐る学校生活を送っている全校児童に向け、最上級生として「マスク笑顔挨拶運動」を働きかけました。うれしい出来事でした。他学年においても体系的にはありませんが、地域、福祉、食、生き方の視点から、安全や防災にも触れ、よりよい生活に向け、子供自身が考えることを大切にしています。

二つ目は、世代が代わり記憶がどんどん薄れる中であって、防災教育年間指導計画をもとに防災副読本を活用し、当時の状況や人々の取組を理解すること、加えて自助・共助についての知識と技能を防災の基礎基本として学ぶことも大事にしています。先ほどの5学年においては、避難所運営委員会事務局長がゲストティーチャーとなって出身地でもある女川の様子も含め、市名坂の避難所運営の詳細を話していただきました。私も昨年、将監小学校に行きお

話をさせていただきました。当時のことを風化させないためにも、次世代に伝えることやつなげることは、大切にしなければいけないと思っています。

最後に地域防災基盤の確立です。本校は、平成25年に地域主体、自主運営の避難所運営委員会が立ち上がりました。女性コーディネータも位置付け、女性や高齢者、障害者の立場も尊重した仙台市でも先進的な運営を行っています。地域住民の防災意識が高いことはおのずと子供たちにもよい影響を及ぼします。平成26年には総合防災訓練に着手しましたが、今後、学校と地域一体型の防災教育も展開していきたいと思っています。地域とともに歩む防災教育の充実が急がれる本校です。

蓮沼校長

私は、防災学習では震災の事実と教訓に学ぶ学習と、その学びを踏まえて校区に応じた備えや有事の対応を、家庭や地域と共有することが大切だと考えます。現在中学校区で学校と地域が連携した合同防災訓練を実施していますが、そのような観点から本校での防災教育を評価すれば道半ばにあり、今後特に充実させたいと思うのは「リアリティのある学習」です。

災害の恐ろしさ、生命や生活に及ぼす影響を知る学習が児童の「必然性」となり、自分事として学びに向かう動機になると考えます。子供たちが震災を知らない世代になっていくことから、「震災遺構仙台市立荒浜小学校」の活用や被災体験者と交流する学習が大きな意味を持つことは周知のことです。本校でも被災の激しかった地域での校外学習の実施と、当時の地域の被災状況など地域の方や家族に聞き取

りまとめていく活動などにも取り組ませたいです。また、本校区は浸水エリアにあることから、自分や家族の安全を確保するために、浸水被害や避難を想定した学習が不可欠です。地域においては、地域合同防災訓練を想定される状況に応じた、より実践的な内容へと見直す時期にあります。本校の防災教育を「リアリティのある学習」の視点から充実させていくために「社会に開かれた教育課程」として地域や家庭と共有し連携・協働して取り組む必要があります。今年度から設置予定の学校運営協議会で議論を始め、学校教職員と地域住民とで、防災教育と地域防災の連携・融合につながる取組を熟議する場づくりなどから、今後の防災教育の取組に反映させたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症については、現在進行中の危機であり、既に危機管理室からは、感染症に対応した避難所運営が求められ、対策に万全を尽くさなければなりません。防災教育を天変地異による「自然災害」に限定せず、「生物災害」である感染症等に対応する防災・減災の力を身に付ける学習の位置付も課題となります。

最後になりますが、震災の事実と教訓を学ぶ学習への支援についての要望です。冒頭に本郷課長から「震災遺構仙台市立荒浜小学校」の活用学習の交通費について御説明がありましたが、各校で等しく防災学習での震災遺構の活用を進めるためにも、児童が震災遺構の見学や被災エリアに移動して学習する場合、交通費を一律とする補助制度の導入等を是非お願いしたいと思っています。防災教育が本市の教育施策の重点事項に位置付けられていることから、仙台市として前向きに検討を進めていただくことを期待しています。

司会（八島）

3人の先生方、二つ目の視点についての発表をありがとうございました。それではここで、仙台市小学校長会花淵会長に発表についての総括をお願いし

ます。

【総括】花淵会長

今日は、教育指導課 本郷栄治課長から仙台市の施策について、3人の校長先生方から9年を経ても変わらぬ震災当時のお仕えした校長先生方の学校経営、地域運営等について貴重なお話をいただきありがとうございました。9年前、私も、当時勤務していた市役所北庁舎の建物にある教職員課に所属しており、震災発災直後は、最初建物内にとどまっていたのですが、発災後3時47、48分頃だったと思うのですが、外に出るようにと指示があり、一時的に勾当台公園市民広場に避難したのを覚えています。そこから見た市役所西側の高層マンションが柳の枝のように大きく揺れていたのを思い出されています。その後、夜になって課長から近隣の学校に行くよう指示があり、私は夜8時頃だったでしょうか、五橋中学校に行きました。中学校は御存知のとおり卒業式前日でした。

あの当時の駅前のホテル客は、全て仙台市の避難所へ行きなさいという指示が出ていたので、東二番丁小学校、片平丁小学校、荒町小学校が埋まり、そして五橋中学校に、その後榴岡小学校、東六番丁小学校までホテルの客でいっぱいになったということでした。その夜は停電の中、ウェスティンホテルだけが自家発電で明かりが灯っていました。そこに仙台通信病院の患者さんが避難され、人工透析をしていたということも聞きました。その時、五橋中学校では、武道館、体育館、1階の教室におそらく3,000人位の人がいたのではないかと思います。ただ、避難された方は一言も声を発せず、真っ暗な中、黙って座っていたのを覚えています。

五橋中学校は当時も遠くから通っている子がいて、その日は交通機関もまひしたため学校に留め置かれていた約30名程度の生徒がいました。たくさんの避難者がいたので、トイレの問題が出たとき、寒い中、生徒たちがジャージのまま、すすんで4階に

あるプールの水をバケツリレーで何回もトイレに運んでいたことを昨日のように覚えています。先生方がそのようなことを指示する暇はなかったので、自分たちで何ができるのか考えて行動していた姿に涙ができました。また、その当時の校長先生は、一晩中一睡もせず校門に立ち、避難者を誘導していました。私が「交代しましょう。」と何度も声を掛けたのですが、「ここは私の学校です。私が守ります。」といて避難してきた方に「御苦労様です。」と声を掛けていました。あの校長先生の姿を見たとき、私は「これが校長のあるべき姿なんだ」と痛感しました。

また、後日談ですが、荒浜小では本来2階と3階を避難所にあてる予定でした。しかし、前日に7学年の教職員が避難訓練の確認等を行った際、避難所を3階と4階に変更しました。変更した次の日に震災が起こり、児童全員が4階に避難し、町内会の避難場所が3階になったわけですが、川村校長先生より混乱なく町内会を誘導できたということを伺いました。また、寒さに耐えるために理科室のカーテンを外して寒さをしのいでいたという話も伺ったのですが、児童は誰一人泣き叫ぶことがなく静かにヘリコプターを待っている姿がとても立派だったという話を聞いています。

当たり前の言葉ですが、「備えあれば憂いなし」。これまでのお話を伺い、これからの校長には、「高い危機管理意識」「臨機応変な対応と判断力」「防災教育のカリキュラムマネジメント」の三つが必要で、その地域によって柔軟に対応することが必要だと思いました。また、先生方のお話を聞いて、リスクマネジメントも重要だということを改めて感じました。児童に防災対応力を身に付けさせる上では、これまでの防災学習に加え、バス代の問題もありますが、震災遺構荒浜小学校の見学など体験学習や職員研修を重視しながら防災教育を継続して実践することが重要だと思います。

昨今、日本各地で災害が増えています。本郷課長のお話にありましたように、最高裁での大川小学校

の裁判は、学校にとって大変重い判決が確定しました。あんな所まで津波が来るはずがない、千年に一回の津波で海から遠い所まで来るはずがないでは済む問題ではないのです。つまり、最悪を想定して学校長は学校・子供たちを守らなければなりません。このことを肝に銘じて防災教育の原点に立ち返って指導を続けてほしいと思います。校長自身があの震災を「風化してはいけない、風化させない」ことが今後10年間大事なことだと思います。我々校長はこの判決文を読んで内容を理解し、もう一度気を引き締めて取り組んでいかなければなりません。

最後に私事ですが、今月末に、福島第一原子力発電所と帰宅困難区域である大熊町と浪江町の小学校を視察する予定になっております。視察するのに、福島県校長会の方から様々な注意事項や身分証明書を持参しなければならず、まだまだハードルが高いと感じております。原発構内はまだ放射線量が高く廃炉まで30年～40年以上かかるといわれています。平成30年に浪江小学校が再開されましたが、現在も1,162名いた浪江町の小学生は、多くの児童がいまだに戻っておりません。おそらくもう戻ってこないではないかと思います。同じ東北の仲間としてこれからも心を寄せていきたいと思います。

本日は、大変ありがとうございました。

司会（八島）

ありがとうございました。それではまとめに入ります。教育指導課本郷課長様より、今後の各校における「仙台版防災教育」の推進に向けて校長に期待することをお願いいたします。

【まとめ】本郷課長

今日は校長先生方から様々なお話を聞かせていただき、指導課として今後どのような方向でいけばよいか考えさせられる時間になりました。震災遺構の見学については最終的には全ての学校で訪問してもらうよう働きかけていきたいと思います。今日は発

生時のいろいろな小学校の先生方の話を伺いましたが、私も平成23年3月11日、午後2時46分、三陸沖でマグニチュード9の地震が発生した当時を振り返りますと、私は泉区西部の中学校に教頭として勤務しており、翌日の卒業式の準備をしている時間帯でした。けが人は出ませんでした、天井から水銀灯が落下した体育館はガラスの破片が散乱したため、勤務校は避難所としては使えず、隣接している小学校の体育館が地区全体を集約した避難所となりました。また、校舎の屋上にあった貯水タンクを支える四本全ての柱に大きなひびが入ったため、倒壊する恐れがあるとの判断から校舎も使用できなくなりました。卒業式は、3月末に会場準備が大方終了していた体育館で実施することができましたが、小学校の校舎を借りて新年度を迎える準備等はできないまま私は教育委員会に異動することになりました。教育委員会では、被災校における仮設校舎や他校施設を利用した授業再開の状況把握と教育活動再開への様々な支援を担当し、大変厳しい学習環境にありながらも、校長先生の強いリーダーシップと教職員の強い使命感により困難な状況の一つ一つ乗り越えていった、と思っています。

この震災を様々なレベルで体験した今を生きている私たちは、歴史の目撃者として、子供たちに語り継いでいかなければならないと考えております。そういった意味で、これまでも多くの自治体からの視察の方々へ話していることがあります。それは、東日本大震災により家族を亡くした一人の児童のことです。震災後、その児童は県外にいる祖父母に引き取られていきました。その後の様子について、祖母と教育委員会の間でしばらくの間連絡を取り合っていました、震災から2か月ほど経過した頃の祖母からの手紙には、一緒に暮らしていた家族全員が見つかり、お別れの会をしました。その際、残されたその児童に挨拶をさせたことが書いてありました。理由は、この子は将来にわたってたくさんのつらい思いをしていくことになるだろう、だからこそ、今

からそのつらさを乗り越えられるようにしました、とのことでした。今でも思い出す度に涙がこぼれてきます。そのほかにも、学生時代に共に学んだ友人が大川小学校で、教え子が閣上で命を落としており、残された家族のことやもっとやりたいことができたはずだったのにとすると悔しくてなりません。このような思いはしたくはありませんし、させたくもありません。災害や状況によっては命を守ることができると信じています。現在、そして、大人として将来を生きていく児童に、災害時に自分の命を守り、安全を確保する自助の力、災害時の対応や地域の復興に協力し参画する共助の力を育むことを目指し、平常における「防災」と災害時における「災害対応」の双方の力である「防災対応力」を身に付けさせなければなりません。将来にわたって子供につらい思いをさせないようにするための責任が私たち大人に課せられています。

花渚校長先生の開会の挨拶にもございましたが、小学生のほとんど全員が、震災を直接体験していない・記憶にない児童であります。学校におきましては、当時何が起きたのか、人々の対応や思い、他地域からの支援等、生きた体験を伝えながら、仙台版防災教育副読本やゲストティーチャー、震災遺構仙台市立荒浜小学校、教師自身による語りなどを計画的に活用し、震災を学び、伝える授業の充実を図る必要があると思います。また、丹野校長先生の話にもありましたが、異常気象が続く大雨による河川の氾濫や道路の冠水、倒木、地滑り、土砂崩れ、雷、竜巻等の災害は局所的に発生しています。児童が日常の生活地域外で遭遇する可能性のある災害についても、幅広い防災対応力を育んでいく必要があるとも考えています。ただ、学校教育の力だけで防災対応力が身に付くものではなく、特に共助の力は地域の中でも育まれていくものであり、震災を通して地域とのつながりを実感することもできたと思います。また、登下校や在宅中も含めて、保護者、地域との共通理解、共通行動できることが必要であり、

そのためにも学校と地域の協働の関係づくりに努めなければなりません。

最後になりますが、学校は、学習指導要領を踏まえ、各教科等の防災に関わる指導内容を教科等横断的な視点で関連付けた年間指導計画の作成、副読本の活用、ハザードマップにも掲載されているマイ・タイムラインの活用啓発、地域との平素からの信頼関係づくり、地域の実態把握など、防災教育を進めていく上で多くのことに取り組んでいかなければなりません。今後とも行政と学校が共に力を合わせて、心豊かでたくましい子供を育ててまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会（八島）

今日の座談会では、「震災時の教訓を風化させないための取組について」をテーマに、御参会の皆様からお話をいただき、最後に花渕会長からは総括、本郷課長からはまとめのお話をいただきました。大変ありがとうございました。進行を事務局にお返しします。

【閉会の挨拶】佐藤副部長

本日は御多用のところ、仙台市教育局学校教育部教育指導課長 本郷栄治 様、仙台市小学校長会長 花渕浩司 様、市名坂小学校長 丹野伸裕 様、柳生小学校長 蓮沼秀行 様、高森小学校長 阿部淳一 様に御出席いただき、大変貴重かつ大変重要な、そして今後にもつないでいかなければならないお話をうかがう

ことができました。震災10年目の座談会として大変ありがたく心から御礼申し上げます。

本日は、「震災時の教訓を風化させないための取組について」をテーマに、「仙台版防災教育」の取組や、「震災時の教訓・体験をどのように受け止め、後世に何を伝えていきたいか」について、子供たちだけでなく教職員として震災を経験しない人が多くなる時代になります。また、先の見えないいろいろな災害等、病気についての対応として、各校における「これまでの取組や新型コロナウイルス感染拡大防止の観点を踏まえた自校の仙台版防災教育の推進」をもとに、小学校長会のテーマでもある「未来を切り開く子供たちを育てよう」とする皆様の意欲や熱い思いから、今後の指導におけるたくさんの手掛かりをいただきました。また、改めて「教育振興基本計画」に示された理念を確認するとともに、今後の校長としての危機管理や学校経営のあるべき姿について思いを新たにすることができたところで

皆様から紹介していただいたお考えや、各学校の実践の様子などについて、令和3年1月発行の会報『廣瀬川』99号に掲載させていただき、確実に会員に伝えたいと思います。また、仙台市小学校長会が目指すこれからの学校経営の在り方について、全国の小学校長会の皆様にも発信してまいる所存です。

皆様、本日は、誠にありがとうございました。以上、御礼を含めまして、閉会の挨拶とさせていただきます。



提言

復興に向けた創意ある教育

どんぐりの森に

第1地区会長 三浦 敏光 (向山小学校)

本学区にある大年寺山から遠くを眺めると、海岸にある松林の間から初日の出を見ることができたと以前地域の方から伺ったことがある。

ところが、震災で海岸線に松林がなくなり、景色が一変してしまったとのこと。そのことを残念に思った大年寺山にある伊達家墓所の清掃ボランティアから海岸に植樹してはどうかという提案が出され、その後、今の「どんぐりの森プロジェクト」という活動に発展した。

本校で毎年行っている「どんぐりの森プロジェクト」とは、野草園と連携しながら実施している行事である。

本校の1・2年生全員が、毎年、生活科の授業で、向山中央公園に落ちているどんぐりの実を拾い、一つずつ丁寧に植えている。その中でプロジェクトの目的を野草園の園長にお話ししていただいたり、皆で復興ソングを歌ったりして復興への思いを絶やさないようにしている。そのどんぐりを2～3年間育て、苗木を東部地域の海岸公園や公園緑地に植樹す

る活動である。植樹は、当初自分たちが植えたどんぐりを4年生全員がバスで現地まで行って苗木を植えていたが、現在は、土曜日に植樹するということもあり、全校から希望した親子が参加する形になっている。

今年で8年目を迎えた「どんぐりの森プロジェクト」。最初に植えた苗木がどんどん大きくなり、海岸公園が徐々に緑を



取り戻してきている。海岸公園として以前のような姿に復興するには、まだまだ長い年月がかかる。緑豊かな東部地域の景観を取り戻し、大年寺山から森林の間に初日の出が見られるまで、この「どんぐりの森プロジェクト」を関係団体と連携・継続していかなければならないと強く思う。そして、50年後、100年後、向山の地から採れたどんぐりが、海岸線を緑豊かに彩ってくれることを期待している。

提言

復興に向けた創意ある教育

地域とともに学び合う学校

第3地区会長 三井 裕 (荒巻小学校)

東日本大震災から10年がたとうとしている。あのとき私たちは、避難行動や避難所運営から学校再開までの過程で、学校と地域との日頃からの信頼関係やつながりが大きな力となることを実感した。

しかし今、新型コロナウイルス感染症に係る問題により、大切な地域とのつながりを持ちにくい状況になっている。感染防止対策に最大限努めつつ、どのようにして地域との顔の見える関係を築いていけばよいか、多くの学校が苦慮していることだろう。

本校は、6年前から自分づくり教育の一環として起業教育を進めてきた。5・6年生が総合的な学習の時間に「荒巻元気アップ作戦」のテーマで、地元の商店・事業所やゲストティーチャーの協力を得て荒巻地域の活性化を目指した学習活動に取り組んでいる。毎年6年生は、その年の子供たちなりのアイデアや趣向を凝らし、地域をPRするオリジナルイベントの企画・運営を行ってきた。

今年は、このような状況下のため、一斉に大勢を集めて行うイベントの開催を断念した。その代わり

となる地域活性化の活動について考えた末、5年生時に在仙シンガーソングライターの伊東洋平さんとコラボした荒巻応援ソング「山手町の坂の上で」のミュージックビデオの制作に取り組むことにした。子供たちは、動画の中に荒巻小に加えて地元の商店などを登場させたいという願いを持ち、出演交渉に当たった。密にならないように少人数グループで各商店等を訪問し、2月の発表会に向けて撮影・編集を進めている。この活動を通して、子供たちと教職員は、地域の方の仕事への誇りや地域に対する思いについて学んでいる。また、地域の方からは、子供たちの活動の姿や作品によって元気をもらっているとの声が寄せられている。

今後もしばらくの間ウィズ・コロナの生活が続くだろう。安心・安全の確保を第一とした上で、様々な工夫をすることで、子供たちの主体的な活動を軸とした「地域とともに学び合う学校づくり」を継続して進めていきたい。それが、子供と教職員と地域の人々の命を守るためにもなると考える。

提言

復興に向けた創意ある教育

震災復興に向けた学校経営で大切にしたい理念について

第5地区会長 佐藤 貢（宮城野小学校）

平成23年3月11日の東日本大震災から10年たった今こそ、復興に向けた学校経営の基本とすべき理念を3点記したいと思います。

1点目は、平成24年4月の校長会総会で、当時の久能会長が話された「今こそ、復興に向けた強い意志の下、校長としての矜持を示していく時、復興は教育の力で」という言葉です。校舎だけでなく、地域全体が被害を受けた学校から、明日にでも授業を再開できる状況にある学校まで、各学校がいろいろな状況下にあったものの、校長全員が、被害の大きかった学校の校長としての意識を持ち、悩みや困難を共有し取り組みました。そのときの一体感や熱量は、復興に向けとても大きな力となりました。コロナ禍にある今でも通じる「当事者としての責任」の重みを伝える言葉です。

2点目は、感謝の思いを持ち続け、発信し続けることです。復興に向けて、たくさんの支援や温かい心遣いを全国からいただきました。その一つ一つが本当にありがたく、復興の大きな力になりました。

その後の全国大会等で、その思いを伝え続けていますが、日常的に私たちは感謝の思いを持ち続けて、発信していくことが大切です。「仙台はあのときの恩を忘れません。」全国の校長たちと連携を続けたいものです。

3点目は、正しい理解と備え、語り継ぐことの大切さです。仙台版防災教育は、復興の歩みの中で生み出した、まさに結晶です。必ず、全学年で取り組む時間を保障し、理解と備えの大切さ、そして永遠に語り継いでいける仙台っ子を育てていくことが大切です。「希望の道」もそうです。歌い継いでいきたいものです。

震災を経験していない教員が約4割を超える時代が来ています。基本理念を大切に、校長として学校経営に当たる必要があります。それこそ、仙台市の校長の責務だと私は考えています。

提言

復興に向けた創意ある教育

May I help you

第7地区会長 高橋 洋充（長町小学校）

インターネットの前はパソコン通信がコミュニケーションの場であった。私は若かりし頃、ニフティサーブの教育関連の会議室で多くのことを学んだ。最大の学びは「困っている人を助けることが、自分を助けることになる。」ということである。そのことをより実感したのは、仙台市にコンピュータが導入された1995年頃、宮城県教職員対象のメーリングリスト「teams」を運営していたときである。お互いに知り得た情報をやりとりすることで、先の見えない導入期を希望に満ちた時期にすることができたのである。「横のつながり」に必要なことは「情報を提供する」ことであり、「May I help you」の精神であることを体験的に学んだ。

東日本大震災時は六郷小学校の教頭であった。学区内が津波により被災し、多くの助けを必要としているとき、多くの方々が直接現場に駆けつけ、惜しみなく力を貸してくれた。「絆」という言葉が生まれ、つながることの大切さを証明してくれた。

今年、コロナ禍で「先が見えない、正解が見えない」

状態の中、まず頭の中に浮かんだことは「横のつながり」である。7地区では地区会の前にアンケートを実施し、事前に印刷物として準備することで横のつながりを形にしようと考えた。校長先生方は多忙な中、毎回、自校の状況のみならず心の中まで文字にして共有してくださった。良かったことだけでなく、困っていることや改善策までも共有してくださることが多く、勇気付けられた。

アンケートに記された一文を紹介したい。

「あの学校ではこうやった」「あの学校ではこうしている」などと聞くと気が焦ることもあるが、「やりたいこと」と「できること」は違う。「今年はこれでいいのだ」と自分に言い聞かせながら、自校の実態を大切に、日々より良い判断を積み上げていきたい。

先が見えない状況で校長として大事なことは、「情報を提供すること」と「判断すること」である。

学区紹介 地域とともに

地域ならではの素材を学習に

佐藤 由美 (台原小学校)

今年度、本校は開校62年目を迎えました。開校当時から地域の多くの方々や保護者の皆様に支えられてきました。現在も、スーパーバイザーさんを中心に、日常的に地域のボランティアの方々やPTAの皆様から授業や活動の支援、登下校の見守り等、様々な場面で温かい御支援をいただいております。

さて、本校の学区には四季折々に違った顔を見せる台原森林公園があります。この公園を学習の素材に活用したいと考え、昨年度から1年生の生活科に取り入れることにしました。そこで、登場したのが森林公園の自然に詳しい地域の方々です。職員の下見に同伴し、季節ごとの森林公園の姿や安全面の配慮等を教えていただきました。そのおかげで、季節に応じた学習を充実させることができました。

子供たちにとって「公園の先生」は、スーパー先生です。草や木、木の実やきのこ、鳥や虫……。公園のことは何でも知っています。ボランティアの皆

さんは「この年になって、子供たちのために何か自分でもできるんだと分かった。生きがいができた。」と話しておられました。

地域ならではの素材を学習に取り入れることは、「教職員が学校とその地域を知ること」「子供たちが地域を知り地域を誇りに思うこと」「地域の方々が自分たちの知っている地域の情報や知識・知恵を子供たちの学習に活用すること」等、それぞれに大きな学びが生まれます。地域の中で学びが循環しているように思うのです。

今年度は感染症対策で、例年に比べ地域の方々との交流は十分ではありませんが、それでも工夫しながら台原小ならではの活動を続けています。感染症対策の中で教育活動を進めている学校に、マスクやマスクケース、台布巾等の物資面の御支援や応援メッセージが多数寄せられました。校舎内に掲示しているメッセージを目にするたびに、学校は地域の方々から大切にされているのだと改めて感じます。

本校は地域の自然・人・もの等に感謝の気持ちを持ち、大切に有効に活用させていただきながら、今後も教育活動を充実させていきたいと思ひます。

学区紹介 地域とともに

地域の方々の思いに込めて

千田 博史 (荒井小学校)

本校は、地下鉄東西線の開通や宅地の開発に伴い、児童数が増加した七郷小から分離し、仙台市内128番目の小学校として4月6日に開校しました。

天然木を生かした3階建ての校舎には、階ごとに設けられた次世代型多目的室や3年生以上の学年には少人数指導教室を備え、きめ細かくで多様な学びへの配慮がなされています。また、2階図書室と3階コンピュータ室が情報ステーションとしての機能を発揮するように専用階段で結ばれていたり、「荒井ファーム」と呼んでいる学童農園が校舎の2階に設置されていたりと、主体的な学びのための様々な工夫が施されています。

開校式には郡和子仙台市長の参列はかないましたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、6年生と教職員、教育委員会のみに参加者を限定しての開催となってしまいました。佐々木洋教育長より、開校の証として校旗が授与され、代表児童が「私たちの地域は震災で大きな被害を受

けました。地域の方々や友達との絆を大切にし、つらいことがあっても希望を忘れず、夢に向かって進んでいきたい。」と抱負を述べました。子供たちが、この恵まれた教育環境で楽しく学ぶことは、長年「この地に学校を」と願ってきた地域の方々の思いに込めていくことになると感じ、身の引き締まる思いがいたしました。

今年度は、開校記念という冠を付けた学校行事の実施が難しい状況があります。そのような中にありましても、児童、保護者、地域の方々、教職員による校歌制定への取組が進んでいます。「歌詞に盛り込みたい言葉」のアンケートには約550件の応募があり、それを基に校歌制定委員会が作詞をしました。今は、新しさを感じるメロディーを作曲者に依頼中です。学校への思いを深く持つ方々と子供たちが、声高らかに歌える日が早く来ることを願っています。

新たな校風の樹立と教育目標である「夢や希望をもち、豊かな心でしっかり学び、たくましく生きる児童の育成」に向け、子供たちと共に、教職員一同、心一つにまい進していきたいと思ひます。

研究部から

研究部の活動を振り返って

研究部長 菅原 弘一（錦ヶ丘小学校）

1 はじめに

今年度最大のイベントであった第60回東北連合小学校長会研究協議会宮城大会は、新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて中止となり、大会要項の作成をもって開催に代えることとなった。仙台国際センターを会場に、東北各県の校長を迎え、盛大に開催するはずの大会が中止となったことは大変残念であった。総力を結集して準備してきたことをしっかりと記録に残し、令和8年度の宮城大会（東部・本吉大会）に引き継いでいきたい。予定していた研究発表については、例会や研究協議会において、領域別研究委員会、学校課題委員会、指定都市問題研究委員会の発表の場を設けていただいたことに大変感謝している。

定例の研究部会についても、初顔合わせは10月5日(月)となった。これまでの研究の整理と、次年度以降の研究の準備に向けて動き出すことができた。

なお、宮城県の研修部との間で、年2回開催してきた「県市研修部連絡協議会」は、9月に1回のみ開催し、大会において発表予定だった各地区の研究内容について共有しながら、今後に向けた確認を行った。

2 東北連小宮城大会

領域別研究委員会が中心となって分科会運営などを行う予定だった第60回東北連合小学校研究協議会宮城大会での研究は、誌上発表となった。大会主題の理念をより一層推し進めることを目指し、副主題を「夢と希望をもち 共に新しい未来を切り拓く子どもを育てる学校経営」とし、学校経営の責任者である校長の果たすべき指導の在り方について究明しようとするものとして、令和2年7月2日～3日に開催予定であった。

大会一日目、シンポジウムには、NPO法人森は海の恋人・理事長の畠山重篤氏、南三陸ホテル観洋・女将の阿部憲子氏、エフエム仙台・防災減災プロデューサーの板橋恵子氏をお迎えし、「震災から復興、そして未来へ～震災を忘れない～」をテーマに、

復興への思いや未来を担う子供たちへの願いをお聞きする予定であった。東日本大震災当時から困難を乗り越えながら復興に向けた取組を進めてきた三氏のお話から、リーダーとしての在り方や未来社会を担う子供たちの教育の在り方について、大きなヒントを得ることができると期待されたシンポジウムであった。開催はかなわなかったが、シンポジスト三氏の紹介を大会要項に記し、開催に込めた願いを記録として残すこととした。

大会二日目「分科会」は、①経営、組織・運営 ②評価・改善 ③知性・創造性 ④豊かな人間性 ⑤健やかな体 ⑥研究・研修 ⑦学校安全 ⑧危機対応 ⑨自立と社会性 ⑩連携・接続の計十分科会で構成した。研究課題ごとに二つの視点を設け、研究実践発表に基づき、付箋紙なども使用しながらグループの創意でグラフィカルに協議内容を整理してもらうなど、工夫を凝らした運営を目指していた。本市の実践発表と発表者は、以下のとおりである。大会要項に収めているので、貴重な実践の記録として、他地域の実践と併せて参照いただければ幸いである。

・第2分科会「評価・改善」学校の活力を高める学校評価・教職員評価～家庭・地域と共に歩む学校づくりに生かす「協働型学校評価」の取組を通して～（学校課題委員会・栗生小学校 五十嵐誓 校長）

・第3分科会「知性・創造性」知性と創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善における校長の在り方～教員が主体的に関わるPDCAサイクルの確立のために～（指定都市問題研究委員会・沖野小学校 飯野正義 校長）

・第9分科会「自立と社会性」未来への夢や志を育み、未来を切り拓く実践力を育てるための校長の在り方～仙台版キャリア教育「仙台自分づくり教育」の推進をとおして～（領域別研究委員会・南光台小学校 根本弘美 校長）

3 指定都市小学校長会研究協議会堺大会

予定では、令和2年11月5日～6日に渡って行われるはずだった第74回指定都市小学校長会研究協議

会堺大会は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、誌上発表という形での開催となった。

仙台市は、大会1日目に行われる研究協議会「第1分散会 学校経営上の諸問題」での発表を担当しており、研究のテーマを「教職員の参画意識を高めチーム力向上を図るための校長の在り方 ～教職員が主体的に関わるPDCAサイクルの改善を通して～」として、研究を進めてきた。

教育や学校に対する課題が複雑化・多様化する現在、学校経営ビジョンを明確にし、教職員が一丸となって学校運営を行っていくことが、その解決に向けての大きな力となることは間違いない。そのためにも教職員一人一人は、目指す子供の姿を中心に捉え、主体的に学校経営に参画すること、その上で校長が教職員全体のチーム力を生かし、組織を活性化させていくことが、ますます求められる。

このことを踏まえ、本研究では、教職員一人一人のPDCAサイクルに焦点を当て、校長の在り方について具体的な方策を考えていくこととし、経営参画意識の高い教員を抽出したインタビュー調査も行った。人数は23名である。(市内小学校の10%程度から抽出)ここでは、教育に対する一人一人の思いや、これまでの経験をじっくりと聞くことができるなど、アンケート調査にはない良さを実感することができ、研究の手立てとしても有効であったと実感している。

また、指定都市委員会を開催する中で、各校長それぞれが、自校の経営について工夫していることや、問題点などを出し合う場面が何度かあり、その時間がとても有意義であったということが、委員の総意である。これまでも私たちは、様々な機会を通して学校経営に必要な情報を共有してきたが、その必要性は更に強くなっていくものと考えます。

4 仙台市小学校長会研究協議会

(令和2年11月17日)

仙台市教育センターを会場に、学校課題委員会が研究を続けてきた実践事例をもとに研究協議を行った。

【研究主題】

「学校の活力を高める学校評価・教職員評価～地域と共に歩む学校づくりに生かす協働型学校評価の在り方 3年次～」

花洲会長による開会の挨拶に続き、以下の三つの実践事例を紹介した。

①「学校の活力を高める学校評価・教職員評価」(事例校：桜丘小学校、古城小学校、長町南小学校)

②「面談における目標設定・修正を通じた教員への働き掛けの工夫」(事例校：八本松小学校、北中山小学校、金剛沢小学校、鶴巻小学校)

③「学校の実情に即した業績評価の進め方」(事例校：生出小学校、高森小学校、七郷小学校)

実践例を受けて、隣席同士の校長間で情報交換を行った後、2名の助言者から指導助言を頂いた。始めに、宮城教育大学キャリアサポートセンター 吉田秀夫 特任教授からは、発表された実践についての価値付けをいただき、学校規模別に教職員評価を進めるアイデアを頂いた。また、教職員評価の目的について「能力・業績を評価し成績に反映させることはもちろん、学校の教育力を向上させ、児童の健全やかな成長につなげることが大切である」との助言を頂いた。

続いて、宮城教育大学の上廣倫理教育アカデミー 猪股亮文 教育支援コーディネーターからは、「学校評価と教職員評価をどのように連動させるか」について、目標と組織をつなげる「教育課程」への注目について示唆を頂いた。また、知・徳・体の観点で設定している学校教育目標と資質・能力の三つの柱との関連を整理しておく必要性についても助言を頂いた。

学校評価にしても教職員評価にしても、子供たちをよりよく育てるためのツールであることを再確認することができ、意義深い学びの時間となった。

5 東北連小の今後に向けて

今年度は、小学校における新学習指導要領全面実施の年であるが、中央教育審議会の動きが頻繁に伝えられるなど、次の改訂に向けた様々な情報提供が行われている。また、GIGAスクールのように、コロナ禍の影響もあって、思っていた以上に速いスピードで教育環境の大きな変化が学校現場に押し寄せている。

先行き不透明な時代であるからこそ、仙台市小学校長会が、実践的な研究を進めることの意義は大きいと考えている。校長自らが、常に学ぶ姿勢を大切にし、今後も、新しい時代を見据えながら、校長会としての研究を力強く推進していきたい。

最後に、今年度も仙台市小学校長会の皆様には、研究部へたくさんの御支援と御協力をいただいたことに、心より感謝申し上げたい。

生徒指導部から

命と心を守り育む教育への取組 ～令和2年度活動報告～

生徒指導部長 木越 研司（東六番丁小学校）

1 今年度の活動にあたって

小学校長会では、杜の都の学校教育の重点と連携し、今年度も「命を大切にする教育の一層の推進」「いじめ防止、不登校対策の推進」「心の健康教育の充実と強化」を活動の重点に据えている。

生徒指導部では、これらの重点を基に今年度も「児童の健全育成等今日的課題に対し、その指導と対策の充実を図り、各校における学校経営及び校長としての取組に資する」という方針を掲げて活動を行う予定であった。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大防止のための臨時休業や三密（密集・密接・密閉）防止の影響により、これまでの四つの柱であった「調査研究」「関係機関との連携」「研修」「復興七夕」のうち、「調査研究」以外の活動は中止せざるを得ない状況となった。

2 活動の概要について

(1) 調査研究の推進

令和元年度から「不登校対策に取り組む学校経営」を研究主題にして、調査研究を開始した。

令和元年度は、全小学校長に次の項目についてアンケート調査を実施した。

- ① 現在対応している件数について
- ② 工夫や改善を図った取組について
 - ・不登校の未然防止の取組
 - ・不登校の要因の見立て方法
- ③ 効果が見られた取組について
- ④ 今後の課題について

このことによって、各校の状況や具体的な取組、工夫や改善によって効果が見られた取組などについての情報を共有することができた。

令和2年度は、昨年度に引き続き、校長が学校経営を進める上で、不登校対策としてどのような対応・取組を行っているか、具体的な事例について全小学校長にアンケート調査を実施した。

今年度は、不登校対策として、①日常的な取組、②初期対応、③組織的な対応に関して、「工夫・改善を図った取組」「効果が見られた取組」等につい

て調査を行い、各校の取組事例について共有を図ってきた。詳細は仙台市小学校長会の「研究紀要」を参照していただきたい。

不登校児童への支援をどのように推進していくかは学校経営の大きな課題となっている。また、不登校の原因や状況はケースバイケースであり、校長自身が多くの事例を学び、児童の社会的自立を目指しながら、多種多様な支援策を講じていく必要がある。

このような課題と状況を踏まえながら、令和3年度以降の取組を進めていきたい。

(2) 関係機関との連携及び研修について

例年、青少年対策6機関・小中学校生徒指導部会合同会議を、教育相談課、適応指導センター、特別支援教育課、児童相談所、北部・南部発達相談支援センター（アーチル）、子供相談支援センターの6機関と小中学校長会生徒指導部合同で実施していた。

今年度は一同に集まることを避け、事業概要及び連携事例等の紹介は、各機関の資料交換のみとした。

また、小中学校長会生徒指導部合同研修は中止とした。令和3年度は例年どおり実施する予定である。

(3) 復興七夕について

震災以降、毎年全小中学校が参加して復興の願いを込めた七夕飾りを制作してきた。しかし、今年度は仙台七夕祭りが中止となり、七夕飾りの制作もオープニングセレモニーも行われなかった。

復興の思いをつなぐための策として、七夕飾りの再生紙を利用した絵はがきを全児童生徒及び教職員に1枚ずつ配布した。

令和3年度以降は、例年どおり七夕飾りの制作を実施する予定である。

3 次年度に向けて

本市における不登校児童生徒数は令和元年度に過去最高となっている。特に小学校児童の増加が顕著である。不登校対策及びいじめ防止に関しては、本市における喫緊の課題として今後も継続した取組が必要である。生徒指導部の取組が児童の健全育成や各校における不登校・いじめ対応の一助となるよう、次年度の活動を計画していきたい。

新任校長所感

学校経営に寄せる思い

未来を開く子供たちを、
地域とともに

高橋 研 (茂庭台小学校)

新任校長として着任して半年余りが過ぎました。子供たちも私たちも、新しい日常・学校生活に慣れてきているのを感じます。

コロナの影響から、総合防災訓練や夏祭りが中止となり、地域の方と共に活動する場が少なくなっています。茂庭台地区は、以前から地域で子供たちを育てる意識がとても高い方々がたくさんいらっしゃるが、それが本校の強みであるため、現在の状況がとても残念です。

震災時には、子供たちがすばらしい機動力を発揮し、避難所運営の大きな力になったとの話を伺いました。今回も逆境の中ですが、子供たちには力を発揮してもらいたいと願っています。

また、このコロナ禍は、子供たちに行動の制限等を強いるため、少なからずストレスになっていることは容易に想像できます。そのような状況にあっても、震災の教訓を生かし、未来志向でたくましく育つ子供を、地域と共に育てていきたいという思いを強くしているところです。

連携を大切にしながら

吉田 正太郎 (秋保小学校)

例年は、地域と連携した行事が多いのですが、今年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、学区民運動会をはじめ、様々な行事が中止になってしまいました。それでも、行事の実施や避難所運営など、学校と相談するために来校してくださる地域の方々もいらしゃったので、着任後は少しずつですが、顔の見える関係を築くことができました。

また、秋保中学校区は、幼小中で様々な連携が行

われています。夏休み後には、中学校区内の小学校三校合同の学習も感染防止対策をとれるものに絞ってスタートさせました。三校の6年生が地域の方の案内で秋保町内の史跡を見学する「秋保三校歴史探訪」もその一つですが、私も引率しながら秋保の歴史や自然について学ぶ良い機会となりました。

先輩の校長先生方から助言を受け、近隣の校長先生方に支えていただきながら、こんな時だからこそ、笑顔を大切に、校長としてできることは何かを考え、地域ならではの特色や学校の歴史を大切にしたい学校経営を推進していきたいと考えています。

変えるべきこと、
変えてはいけないこと

川合 輝文 (川前小学校)

川前小学校は、仙台市西部に位置し、自然環境に恵まれた学校です。四季折々に移り変わる風景に、心癒されるすてきな地域です。

着任間もないある日、県指定無形文化財である川前鹿踊の指導をなさっている地域の方が校長室を訪ねてくれました。その方は「自分たちは、歴史ある伝承芸能を昔と変わらない形で後世に伝える責任がある。そのためには、これぐらいでいいだろうという気持ちは持たず、一切妥協なく細かいところまでこだわって指導している。」という内容のお話をされていました。揺るぎない信念を持ったその話に、はっとさせられました。変化の大きい今の状況では、臨機応変で柔軟な考え方は大切です。一方で、変えてはいけない大切なものも存在するはずです。変えるべきもの、変えてはいけないものをしっかりと見極め、バランスをとることが肝要なのだと考えます。

未来ある子供たちを育てるために確固たる信念を持ち、教職員と力を合わせて進んでいく所存です。

「愛子の森」

佐藤 雅智 (愛子小学校)

学校の北西に、学校の敷地に隣接して森があります。「愛子の森」です。学校のフェンスに扉があり、直接その森につながっています。開校当初から、その森に行けるように考えていたようです。森には、小道が整備され、広場のようなところには、丸太の椅子が1クラス分くらいそろえてあります。

その広場は、なんとも言えない気持ちのよい不思議な空間です。地面にはたくさんのくすみ落ちています。見たことのない植物も花を咲かせます。この森で、動物や昆虫、植物などについて、その生命のすばらしさを教えてもらおうのです。教えてくれるのが「ハグリッズ」という団体です。ハリーポッターの登場人物からとった名前だそうです。そのメンバーには、保護者や地域の方々をはじめ、きのこを栽培している方や樹木医さんもうらっしゃいます。

森では、教えてあげたいのに学校では教えてあげられないことを教えてもらっています。教える方も教わる方もそれが当たり前のように。そのような団体も含めて愛子小学校だと考えています。

コロナ禍の運動会

佐藤 康隆 (野村小学校)

「こういう状況だけでも、秋には運動会をしたいですね。」学校が再開する前、PTA会長と初めてお会いした席でこのような話をいただき、去る10月31日秋晴れの下、無事運動会を実施することができました。多くの行事が中止や縮小になっていましたが、子供たちから不満の声は出ていませんでした。その分、子供たちの運動会に対する期待はとて大大きく、新しい生活習慣「マスク着用、三密を避ける、手洗い励行」を実行しつつ、ダンスや表現の練習に喜々として取り組んでいました。

運動会の練習をする中で、子供たちは、お互いに励まし合い認め合いながら共に成長し、異学年との交流を通して縦のつながりを更に強めていきました。運動会当日、子供たちの演技中の真剣な表情と掛け声、走り終わったときの満足した笑顔に、見ている保護者、教員はとても感動しました。

コロナ禍の中で、学校行事の意義と大切さに改め

て気付かされました。頑張った子供たちに心からありがとうございます。

子供の学力を高めるために

後藤 暁 (将監西小学校)

私が学校経営を推進するために避けて通れないと感じているのは働き方改革です。私は子供たちの学力を高めてこそ働き方改革と考えています。

転勤すると思うのですが、どこの学校でも何かを作り上げるための時間がかかったり、必要な物を探す時間が多くかかったりと、職員の動きは効率が良いありません。この時間を瞬時に済ませ、教材研究や成績処理などに使えば、子供たちの学力を少しでも高めることができるのではないのでしょうか。

現在、コロナ禍の中不自由な面も多々あり、推進するには、解決していくことがたくさんあります。しかし、コロナ禍で必要以上にやり過ぎていたことも見えてきたことも事実です。今がチャンスだと思います。

幸いにも将監西小学校の職員はチームワークも良く、アイデアが豊富です。また子供たちも学習に対しての意欲もあります。そして保護者や地域の方々も大変協力的です。この学校には動かす力がある。その力を信じて学校経営に努めていく所存です。

共に成長することを目指して

五十嵐 昌広 (八乙女小学校)

学校が再開となった6月の始業式で、子供たちに「これから始まる1年は、いつもと違う1年になります。でも、みんなを成長させてくれる1年に違いありません。コロナだから仕方がない1年とするか、目標を持って過ごす1年にするかは自分次第です。」と伝えました。これは、子供たちだけではなく、先生方、何より自分自身に向けた言葉でした。

あれから半年以上が過ぎました。例年どおりの学校行事はできませんでしたが、年間計画を変更・調整しながらここまで来ました。その間、先生方は可能な限り学校の日常を取り戻す努力をしてくれました。子供たちも様々な制約がある中で、楽しい学校にするために力を合わせていました。保護者や地域の皆様も今まで以上に協力と支援をしてくださいま

した。コロナ禍にあっても、皆で学校を創り、共に成長していくという原点を改めて感じた日々でした。

今後も歴代の校長先生方や諸先輩が築き上げた八乙女小を受け継ぎ、子供たちのため学校の未来のために、歩みを進めてまいりたいと思います。

ウルトラマンエースからの言葉

木村 浩 (中野栄小学校)

本校の協働型学校評価重点目標は「人との関わりを大切にすること」です。

スタートが2か月も遅れ、楽しい行事も思うようにできない今だからこそ、人との関わりは大切にしなければいけないと思っています。

「やさしさを失わないでくれ 弱い者をいたわり

互いに助け合い どの国の人たちとも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ たとえその気持ちが何百回裏切られようと……」

自分が小学校3年生のとき、ウルトラマンエースが最終回で子供たちに伝えた最後のメッセージです。

最初の職員会議では、この言葉を基に「常にやさしい心を持ち、弱い者をいたわり、協力してより良い学校を創っていくこと」を全職員で確認しました。

子供たちには『やさしい心』と『正しい心』で勇気を持って行動しましょう。」と伝えました。

「爽やか」「感謝」「笑顔」を合い言葉に、地域や保護者の方々と協力して「やさしさと笑顔があふれる学校」を創っていきたいと思っています。

学び舎、変われども

小池 正弘 (四郎丸小学校)

今年度から校舎改築が始まります。昭和40年に開校し、長きに渡りたくさんの思い出を作ってきた校舎と校庭も令和4年度に幕を閉じることとなります。多くの諸先輩方により輝かしい伝統を作っていただきました。毎日校長室で写真を見るたび、しっかりと激励していただいているようで身の引き締まる思いです。そして、新校舎となっても諸先輩方の思いを継続・発展していく決意を新たにしています。

今年度、四郎丸小学校の卒業生が教育実習に来ました。小学校時代の先生との出会いで陸上を始め、将来教職に就く決意を固めたとのこと。

新任校長として着任して半年が過ぎましたが、まだまだ手探り状態。コロナ禍の中、地域や保護者の方々のお話を伺う機会がとても貴重に感じます。まだ、自分に何ができるか自信を持って言えることはありませんが、地域の方々と共に、この学校を卒業する子供たちが、将来再びこの学校のために戻って来てくれることを楽しみにして学校経営に当たりたいと思います。



編集後記

新型コロナウイルス感染防止のため、今までとは違う「新しい生活様式」に配慮しながら学校経営に取り組んだ令和2年度も残すところわずかとなりました。さて、この度は、会員の皆様の御協力により、会報「廣瀬川」99号を発行することができました。本号では、震災から10年を迎え、「震災時の教訓を風化させないための取組について」をテーマとした座談会を中心に、各専門部の今年度の歩みや、復興に向けた創意ある教育活動の紹介、新任の校長先生方から寄せられた学校経営への思いなどを掲載いたしました。近年は、地震に加え台風や大雨、洪水等、災害も複雑で多様化してきています。また、新型コロナウイルス感染症についても、収束の見通しが立たない状況にあります。お寄せいただいた提言や実践が、今後の学校経営の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、御多用の中、座談会に御出席いただきました仙台市教育委員会教育指導課長 本郷栄治様を始め、御出席の校長先生方、そして玉稿を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。

(99号担当チーフ 鎌田 記)

編集担当者：鎌田 雅博(福岡小) 板垣 和幸(西多賀小) 工藤 良幸(南光台東小)